

先日、教職研修6月号の冒頭部分「教育の断面」に掲載されていた、在米作家の語りを読み、なるほどと感心させられた。

タイトル「コロナ危機のなか、子どもたちに何を教えるか？」である。

彼は、一連の危機を整理しつつ時代の証言者として人生を歩ませるという教育への覚悟の大切さを伝えるとともに、教育者の責務について、次の4つの素直な視点が大切であると語っている。

- 1 人類全体が「経済よりも個々人の生命を優先した」という事実
- 2 大人の社会が命を守るために必死に戦っていること
- 3 国際社会は協調し、一丸となって戦いに取り組んでいること
- 4 残念ながら日々犠牲者が伝えられていること

また、次の指摘も参考となった。

「平時とは違い、危機においては品格ある善意しか相手には届かない。」

「危機の場合は、小手先の話術は通用しない」

「危機のなかでも届く言葉とは何か」

力を蓄え、教育者としての責務を全うしたい。